～カシュブ語復権の先駆者・詩人を迎えて～

ヤロミラ・ラブダ 朗読会

北海道ポーランド文化協会
第71回例会

Jaromira Labudda

日時：　2015年2月5日（木）18：30～（開場18：00）
会場：　北海道大学クラーク会館3F 国際文化交流活動室（北区北８西７）

カシュブとは…

ポーランド北部のバルト海近くにカシュブ地方と呼ばれる地域がある。カシュブ地方の文化や言語はとても興味深い。
その魅力に触れてみましょう！

プログラム

◆開会のあいさつ
◆カシュブ語概説　　野町　素己
（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター准教授）
◆朗読（カシュブ語）と解説（ポーランド語）　　ヤロミラ・ラブダ
（詩の日本語訳と解説の通訳つき）
◆質疑応答（フリートーク）
どなたでもご参加いただける楽しいイベントです！

入場無料
事前申し込み不要
日本語通訳・解説あり

お問い合わせ
北海道ポーランド文化協会（事務局・佐光まで）
電話・FAX　011−215−6696
samitsu0204@gmail.com
http://hokkaido-poland.com/

後援：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、札幌市・札幌市教育委員会

カシュブ人とその言語および文学
～詩人ヤロミラ・ラブダの来日に寄せて～

野町　素己

ポーランド北部のバルト海近くにカシュブ地方と呼ばれる地域がある。ここにはポーランド語に近い言語を話すカシュブ人が住んでいる。その話者数は 11 万人弱と小規模であるが、方言の多様性が際立っており、20 世紀初頭の研究者フリードリヒ・ロレンツは、76 の方言に分類している。特にバルト海に面する北部方言は古風な特色を保っており、内陸部の南部方言の話者との相互理解は困難であるとさえも言われる。

カシュブ人の言語が独立した言語か、それともポーランド語の方言かという議論は、研究者、政治家、作家、活動家などによって 100 年以上にわたり続けられてきた。言語と方言の違いは、言語自体の特徴に基づくだけではなく、政治的な要因、言語に関わる歴史や文化、その担い手の民族意識の問題が多分に含まれる。ポーランドでも社会主義以前には上記の議論が自由になされたが、社会主義時代にはポーランド語の特殊な一方言という扱いを受けていた。しかし社会主義崩壊後には、ポーランド政府は多言語・多文化政策をとる EU と歩調を合わせ、2005 年、カシュブ語はポーランド政府が行政や教育といった公的領域での使用を認める「地方言語」という地位を得た。つまり今日では政治的にも「方言」ではなく、「言語」ということができるのである。しかし、これはカシュブ語が、大言語がもつ安定した文章語形態を有すことを意味するわけではない。カシュブ語は専ら日常会話で使用され、地域差も非常に大きい。さらに今や全カシュブ人の母語でもあるポーランド語の影響も大きく、カシュブ語は今も文章語形成の過程にある。

カシュブ語の発達において最も重要なのは文学活動である。その端緒はフロリアン・ツェイノヴァ（1817–1881）に見られる。彼は独自の正書法を作り、文学活動を行った。当時、十分な理解を得られなかったため、その活動が結実したとは言い難いが、後世に大きな影響を残した。カシュブ語で文学作品を執筆する伝統は限定的であったが、ヒェロニム・デルドフスキ（1852–1902）に引き継がれ、さらにカシュブ語の独自性を主張しながらもポーランドとの一体性を重んじる集団「若きカシュブ人」を率いるアレクサンデル・マイコフスキ（1876–1938）によって発展された。特にマイコフスキによる英雄譚「レムスの生涯と冒険」（1938）は、カシュブ語の高度な文学的可能性を示す最高傑作であり、現在も広く親しまれている。その後、マイコフスキの影響を受けつつ、カシュブの言語と民族の独自性をより強く打ち出した「カシュブ連合」が結成され、地元の教師アレクサンデル・ラブダ（1902–1981）を中心に、文学活動や標準語形成の試みなど多様な活動が行われた。社会主義時代に入ると、ポーランド政府の立場と異なる「連合」の活動は禁止され、その結果、カシュブ語文化は低迷した。それでも「フォークロア」や「方言文学」など様々な表現形式をとり、その言語文化は継承され、中でも詩はカシュブ文学の主要で伝統的なジャンルとして確立し、社会主義時代にも多くの作品が残された。

今回来札するヤロミラ・ラブダ（Jaromira Labudda）氏は、「連合」の指導者であった父アレクサンデルの血と精神を引き継ぐ詩人で、1977 年の文壇デビュー以来、精力的に執筆活動を続けている。また、カシュブ語が公式に認められていない 1990 年代からカシュブ語教育を始めた、いわばカシュブ語復権の先駆者でもある。

日本ではまだ馴染の少ない分野であるが、激動の時代を経験したその知られざる文化の魅力を、ここ札幌で共有できることをうれしく思う。

（のまち・もとき、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター准教授）

グダンスク近郊の街ウェバのカシューブ祭りでのカシューブ人家族
（ウィキペディア日本語版より）